

## 人生の師 故中井重夫さんを偲んで

2018/04/23 栗栖靖近

去る4月19日、中井重夫さんは享年86才で奥様はじめ温かいご家族に見守られ、幸せな生涯を閉じました。下津研究所時代、みんなから慕われ、尊敬されていた中井重夫さんを思い出していただければ幸いです。

4月18日の真夜中一時、突然夢を見て目が覚めた。『NHK 深夜ラジオ便』からボニージャックスの「そして葉桜のとき」が流れていた。

「ほのかな紅に 身をそめて 二部咲 五部咲 七部咲 今が盛りの花すがた……」と歩いて来た長い桜並木をふと振り返ると「葉桜」だったという歌詞だった。何だか自分の歩んできた道を例えられているみたいだった。

二直三交代の変則な勤務と徒弟的なオペレーターの勤務が性に合わず、退職覚悟で21歳の秋、直訴したところ中研図書室への配置転換となった。主な業務はアンモニアの臭いを嗅ぎながら研究報告書の作成(コピーと製本)に明け暮れる毎日だった。東側は明かり取りの窓ガラスであったが倉庫を改良した古い紙の臭いのする薄暗い図書室だった。それでも JACS(Journal of American Chemical Society)、IEC(Industrial Engineering Chemistry)や沢山の洋書の専門書に囲まれ、主任研究員のしぐさや会話にカルチャーショックを受け、あのアカデミックな研究所の雰囲気大好きだった。

当時(昭和38年ごろ)図書室は総務課に属していたが実質、所長付きの部署だった。研究所創立の功労者であり、威厳と絶対的な権力を誇っていた海軍燃料廠OBのTigerが所長だった。就業時間後時々、Tigerも加わりペスタン(トランプゲーム)に終電車間際まで興じることがあった。何故かTigerは面白がってエキサイトして来るとハンマーを持ち出して机や床をたたくことがあった。その冗談を真に受けて小生と取っ組み合いの喧嘩になる寸前まで行ったことがある。

夏の暑いときなど昼休み時間、図書室隣の土足厳禁、エアコンのあった中井さんがいらっしやった電子顕微鏡室やその対面の大島室長や今なおご指導いただいている西下さん、故勤ちゃん、中井元康君のいるMass室(質量分析室)へ上り込んで凶々しくも床に寝転がって昼寝したものである。定年退職後、この話を西下さんに話したところMass分析室のあの緑の床には「水銀がいっぱい零れていたのだぞ」と脅かされた。

中井重夫さんは研究所年一回の大イベント 研究報告会の看板の字をいかに上手く書くかと言うことで書を習い始めたとご本人から聞きました。瞬く間に知事賞を連



続いて何回も受賞され、和歌山県書道展審査委員のプロの書道家としてご活躍されていた。

無骨者でトラブルメーカー、厄介者の小生であったが組織人としての心構え、箸の上げ下げに至るまであたたかくご指導、ご忠告していただいた恩人の一人でありました。他の人に言われれば不愉快になって怒っていた私も、中井さんに言われれば素直に受け入れることができました。

昭和44年、研究所が幸手に移る時、中井さんは大阪本社潤滑油部へ、小生は大阪本社技術計画部資料室から技術・研究統括常務に出世されていた Tiger の「お前、幸手へ行け」の温かいお言葉を戴き幸手研究所に復帰した。

その後、中井さんは販売技術の道を、小生は販売訓練・教育、出資特約店出向、コスモ石油関連会社出向、LPG 担当等違う道を歩んだが曲がりなりにも中井さんはじめ恵まれた研究所の上司、先輩、仲間たちのお蔭で42年間、丸善石油からコスモ石油へと名前は変わったものの一つの会社で終えることができました。

中井さんは研究所をこよなく愛していらっしゃった。退職してからも奥様ご同伴で毎年、幸手の OB 総会にご出席されていた。

二宮会長の Facebook で昨日の夕方、中井重夫さんの訃報を知った。午後二時、既にお葬式は終了していたが紀州、神前(こうざき)の旧家、長屋門のある600坪の大邸宅 中井家を訪問し、仏壇に手を合わせることができました。広い庭の古木のツツジがやけに目に眩しく美しかった。

そして記帳に「丸善石油・コスモ石油研究所 元部下 栗栖靖近」と記入させていただいた。

〈合掌〉

[会員消息へ戻る](#)